

# ベトナム北部 YX 村の父系親族集団と 家譜に関する覚書 (1)

比留間 洋 一

## 1 はじめに

本稿は、フィールドワークから得られた資料に基づき、ベトナム北部の 1 村落における父系親族集団ゾンホと家譜について記述し、これまでに報告がなされてきた他の 3 事例と比較したものである。本稿の特色は、いかなる条件のもとで系譜的なつながりは集団として顕在化するかという問題意識を念頭におきながら、これまで記述、分析がなされてこなかったゾンホの分節・分裂状態や家譜の分布に注目する点にある。

まず先行研究の概観を述べる。

ベトナム北部の父系親族集団論として、本論で検討するような民族誌的資料を報告したのは末成道男と宮沢千尋である<sup>1</sup>。嶋尾稔による論考は歴史研究であるが、貴重な知見が少なくないので、なるべく触れるようにした<sup>2</sup>。比較対象の概要を表 1 に示した。

末成、宮沢においてゾンホは、人類学の出自論の枠組みで扱われてきた。そこでは、主に、規範としての父系と非父系の明確な区別、実態としての父系と非父系の連続性や非父系の重要性が明らかにされてきた。末成はそれを「父方キンドレッド」という概念として表し、宮沢は「双方的キンドレッド」という別の原理も存在することを示唆した<sup>3</sup>。

一方、嶋尾論文は、冒頭で述べた本稿の特色にとって重要である。嶋尾は、族的（ゾンホ的）結合が歴史的に形成されてきた過程を明らかにした。その契機について嶋尾は、村の儒教化という枠組みで捉え、儒教知識人の役割を重視している。嶋尾に対して本稿は、顕在化の契機を現在学的（調査時点 1997-98）に考察するものであり、

1 (末成 1999)、(宮沢 1999)、(宮沢 2000)

2 (嶋尾 2000)

3 これ以外の論点については(川上・末成 2006:33-36)を参照。

儒教化や儒教知識人以外の条件について詳細にみていくものである。

調査村の YX は、首都ハノイから南西の方角に走る国道 6 号線を 9 km ほど行き、ハドンの町に至る手前を左折、国道からはやや奥まった水田風景の中に位置する集村である。ハノイ市タインチー県に属する。人口約 3000 人（戸数約 750）という規模は、宮沢の調査村（バクニン省の VX）や、嶋尾の調査村（ナムディン省の BC 社）とほぼ同じ（表 1）である一方、未成の調査村たる隣接する TK の人々からは「うちの村のソム（村の地理的下位単位）くらいの大きさに過ぎない」と揶揄される程度である。

表 1 比較対象の概要

	YX 村（本稿）	TK（未成）	VX（宮沢）	BC（嶋尾）
村の規模	約 3000 人 （約 750 戸）	6893 人 （1347 戸）	約 3100 人 （約 700 戸）	3650 人 （1023 戸）
ゾンホの概数	4（祠堂保有）+8	23	2(?)	17（祠堂保有）
生業＋現金収入源	純農＋ゲタ作り、 レース編みの副業	手工業が発達	純農＋各種副業	純農＋野菜、豚 販売

本論の構成は、2 章と 3 章で、それぞれゾンホおよび家譜の一覧表を示し、調査村のゾンホおよび家譜の特徴について検討する。4 章で、それまで述べてきたことをまとめ、とくにゾンホのあり方と家譜の分布との間に相関関係が色濃く見られること等を指摘する。

## 2 ゾンホ<sup>4</sup>の概観<sup>5</sup>と特徴

本章では、前半(2)、(3)の各節で定量的な比較を、後半の(4)(5)(6)(7)の各節で定性的な比較を行なう。とくに(4)分節状態、および(5)分裂状態は 3 章との相関関係を検討する上で重要となる。調査村のゾンホ一覧を表 2 に示した。以下の各節・各項目においては随時、表 2 を参照されたい。

4 本稿の表記は、父系親族集団は「ゾンホ」あるいは単に「ホ」として表し、個別のゾンホについては、現地の漢字文献に倣って「張族」のように漢字で表す。現地では、「ホ」はゾンホでもあり、単に「姓」をも意味する。なおベトナム語文献ないし口語では「張族」は"ho Truong"のように表現される。また文中、意味が通り易いように、ゾンホを「一族」、「族」と表している箇所もある。

5 YX のゾンホの歴史的変遷及びむら祭りとの関係については（拙稿 2006）を参照。

## (1) 表2について

- TK<sup>6</sup> に関しては同種の表が掲載されている。そもそも筆者が作成した表は TK の同種の表を倣ったものである。
- VX の場合、同種の表は示されていない。その理由は、表の各項目にあるようなゾンホとしての体裁が整っているのがほぼ 1 グループのみに過ぎないからであろうと思われる。
- BC については、嶋尾の表は、ゾンホ名、その漢字、祠堂（数）、支派についての記述が示されている。

表2のもととなっている調査は、第一に、族長、族長代行、支派長、家譜保有者、自らのゾンホについてよく知っているとして紹介された者を訪問して聞き取ったもの。第二に、筆者自らの観察に基づくもの。その両者を再構成したものである。張族のありかたがよくつかめず、張族関係者を最も多く訪問した。また、筆者が直接観察したのは、4 大ホ（張、黄、杜、武）の忌祭、杜族の墓参、記録類、4 大ホの祠堂等である。

スペースの関係上、表の中に掲載しなかった事柄について、ここで述べておく。

- YX での墓参りは、どのゾンホも（支ごとではなく）ゾンホ全体と一緒に集まって墓を回るといふ。張族の場合、その後、支ごとに分かれる。掃墓後、集まって食事を取る。観察した杜族の場合、長老若干名が先導して、その後に、掃除のための鋤などを持参した若い青年たち（子供含む）が 20 人程度参加していた。
- YX での忌祭の当番は、大きいホは年齢順であり、大抵の小さいホは毎回族長宅で行なうといった違いがある。
- 家譜についての詳細は 3 章で述べる。

## (2) ゾンホの数

- TK では、その数は 10 姓、23 グループある。同姓だが別々のゾンホとして顕在化しているグループがかなり存在する。
- VX では、村人はゾンホの数を答えることができない。かなりの人が阮文と呉文と

6 煩雑になるので、とくに明示する必要がない限り、以下の TK, VX, BC の記述は引用を示さない。すべて次の論文からの引用である。（末成 1999）、（宮沢 1999）、（宮沢 2000）、（嶋尾 2000）

いう姓であり、一般に三代から五代さかのぼると、系譜関係がわからなくなるからである。

- ・BCでは、祠堂を保有するゾンホが17ある。BCでは「族の活動は祠堂の建設という形で実現されている」と述べている。そうした祠堂のもつ意味合いの大きさは、少なくともYXとは異なっていると思われる。YXでは独立した祠堂は保有せず、族長の家の祭壇を祠堂とみなしているグループ（小さいホ）でもゾンホの活動が実現されていないわけではない（詳しくは以下に述べる）。

要するに、いずれの村においても何を持ってゾンホとみなすかは一概には決めにくい問題であり、表1におけるゾンホの数もあくまで概数に過ぎない。このことはYXについてもあてはまる。

YXではゾンホについて、規約の「はじめに」には以下のようにある。<sup>7</sup> 括弧内の漢字は筆者による。

19世紀初頭までに、イエンサーむらには7つの主要なゾンホがあった。それは、チュオン（張）、ホアン（黄）、ドー（杜）、ブー（武）、グエン（阮）、ティン（淨）、ゴ（呉）である。伝説によれば、以前はレー（黎）というホもあったが、理由はわからないが現在は残っていない<sup>8</sup>。

平和が戻って以後(1954)、「よい土地に鳥は止まる」ことによって、入居する人数が日増しに増えて、ホの数も増加した。

村人に「この村にゾンホはいくつあるのか」と尋ねた場合、大抵、村を形成した大きいホとして、張、黄、杜、武（あるいは阮）があり、それ以外に、いくつかの小さいホがある、といったような答え方がなされる。現在のホの数がいくつなのかははっきりとは認識されていない。上の規約にもそのことが反映されているものと思われる。

一方、表2で示したゾンホの数は12あるが、これは村人の認識ではない。大きな理由としては、第一に表2では、阮の数を4グループとしているが、実はあまりはっき

7 規約は、村長を班長、高齢者の買い主席を副班長とする6名からなる「イエンサーむら文化むら規約編纂委員会」が編纂したもので、1999年12月に県の人民委員会の「閥准」を経て、施行されたものである。その後、各世帯に1部ずつ配布された。「はじめに」にむらの小史がA4サイズ2頁、ベトナム語（漢字ではない）でまとめられている。

8 筆者の知る限り、ゴ（呉）も存続していない。

## 研究ノート・資料

りとはしていない。第二に、表2に掲載されたいずれのグループにも属さない人びとが相当数存在する。その人々は、大抵、新たに入居してきた人々である。<sup>9</sup>

以上から YX のゾンホのありかたをまとめると、4つの大きなホのあり方は、家譜、独立した祠堂を有する点などから、TK、BC におけるゾンホのありかたと共通する。一方、小さいホ、とりわけ阮族は VX におけるゾンホのありかたと共通するといえる。

表2 YX ゾンホ一覧

	姓	人	分節（支と「支」の区別は本文参照）	ホ全体の忌祭回数	代（始祖から族長）	ゾンホ全体の忌祭（日・月）	支派の忌祭	墓祭（日・月）	記録類（家譜、石碑）	祠堂（独立した建物）
1	張	257	支：5→3 「支」：5	2	13	10-12（婆祖） 4-4（翁祖）	有り 6-1 甲支上		家譜、石碑	有り
2	黄		支：2 「支」：3	2	8-9	10-2 支祖の墓参も 10-8（秋の忌祭）			家譜	有り
3	杜	120	支：3 「支」：1	2		12-6 ?		11-1		有り
4	武	300*	支：5→3 「支」：3	2?	17	16?-2（起祖） 18-8（婆祖）	有り	4-1	家譜、石碑	有り
5	阮	62	0	2		26-12, 12-1（前者より大規模）		12-11 に墓参も	（家譜は消失）	
6	阮	45	0	1?	7	16-2（翁祖） 13-5（婆祖）			（家譜は消失）	
7	阮		0							
8	阮	40	0	1		12-4		4-1 墓参り		
9	浄	30	0	1						
10	武 Vm		(5→2)	2	5	25-3（翁祖） 29-7（婆祖）		6-1		
11	杜 Dm	40	(6→2)	1(2?)	7-8					
12	黄清	50	0	3	5?			6-1		

9 これは、誰が村人なのか、こういったグループを村のゾンホとして数えるのかに関する境界が曖昧であることに起因する。

### (3) 規模、分節、世代、忌祭

ここでは数値化可能な4つの項目について比較をおこなう。

#### ①規模

- ・TKでは、1グループあたり289人(末成1998:264)で、30人から500人まで差がある。
- ・VXは比較可能な数値は示されていないが、例外的に大規模に忌日を組織している阮文族の1996年の忌日参加者(村内のみ)は、40人とある(宮沢1999:21)
- ・BCでは、大きいのは3つのゾンホで、村内に残っている戸数が各々100戸を超えている。残りのゾンホは50戸以下とある。

YXでは、判明している範囲では、1グループあたり105人で、30人から300人(ないし257人)まで差がある。ただし、武族の300人は、0歳児も含むものである。18歳以上という一般的な基準では、張族の257人が最大である。

張族ではそのように大きな規模にもかかわらず、TK、BCのゾンホと異なり、ミドルネームを別にしない点が注目される。

#### ②分節

- ・TKでは、1グループあたりの分節数の平均は3.1(データのないグループを分節無しとみなすと2.8)で、2(ないし0)から5までの幅がある(筆者による算出)。
- ・VXでは、阮文族が三支であるらしい(宮沢1999:13)。
- ・BCでは、1グループあたりの分節数の平均は、各ゾンホのもともとの支の数から算出すると、3。その後、それより減ったゾンホが多い。2から6までの幅がある。

YXでは、小さいホはどのホも支に分かれていないとみなせる。大きいホではBC同様もともとの支の数で算出すると、3.7。2から5までの幅がある。

#### ③世代

- ・TKでは、代数の平均は、全23グループのうち記載のある12のグループを計算すると、12.3代で、6から26代までの幅がある(筆者による算出)。
- ・VXでは、阮族が、家譜によれば、十数代(15または18)。一般には3代から5代までしかさかのぼれない、という。
- ・BCでは、詳細は不明だが、家譜では8代(1809年編纂)、7代(1907年編纂)が

知られ、別のゾンホは 20 世紀初頭に 11 代であることが分かる。

YX では、判明している 7 グループを計算すると平均は 9 代<sup>10</sup>で、5 から 17 代までの幅がある。

#### ④忌祭

- TK では、忌祭の回数は、平均 2.1 回で、1 から 3 (ないし 4) までの幅がある。
- VX では、阮文族が例外的に毎年 1 回大がかりに開くのみで、その他のゾンホは始祖の忌日に族長宅で 1 マムを供えるだけであるという。(宮沢 1999:22)
- BC については未詳である。

YX では、平均 1.7 回で、1 から 3 までの幅がある。

#### (4) 分節状態

- TK について末成道男は「支の下にも分節が顕在化することがあり、以下派<sup>ニヤイン</sup> (nhanh) として表すが、支自体その盛衰が著しく、再編成が絶えず行なわれており、派もそれ以上に消長が顕著である。したがって、支と派の区別も相対的なもので、同義に使うこともあり」(末成 1999:264) と述べている。VX、BC でもほぼ同様であろうと思われる。ただし以下に報告するような分節の顕在化の契機や背景については、3 村いずれとも詳細な報告がなされていない。

まず本稿における分節の表記について説明したい。YX では「5 代経たら、別の chi (漢字の支)」という説明がなされたケースがあった。ここに現れているように、chi という用語自体は、上の末成の指摘通り、曖昧である。ここでは支と「支」という表現を用いて記述することにした。以下、支は、一族全体のすぐ下のレベルの分節とみなされているものを指す。一方、括弧付きの「支」は、本来は支ではない分節を人々が支とみなしているものを指す。例えば、一族の事情 (具体例は後述) によって、系譜上は支よりも下位の分節である派 (nganh) ではあるが、人々によって「支」と呼ばれるケースがある。通常、このようなケースでは、その「支」は忌祭や忌祭におけ

10 8-9 は 8.5、7-8 は 7.5 として計算。以下同様、中間値を取った。

る礼拝など実際の活動を行なっていることが多い。

以下の資料の性格は次の2つである。1つは、分節に詳しい当該一族の数人の中高年男性から聞いた話を総合したもの。もう1つは、観察に基づく、実際の分節の共有財や活動に関する概観である。

### ① 張族

始祖から6代目が5人の息子をもうけ、5つの支となった。3支（丙）は Binh Da (Thanh Oai 県) に流れ落ちたが、音信不通。4支（丁）の子孫は行方知らずとなった。2支（乙）と5支（戊）は子孫が残っている。張族の中で、かつての朝廷において最も高い役職についた成功者は、乙支から出ている、という。要するに、2つの支が失われ（失跡）て、3つの支となったわけである。

しかし、1支（甲）の中が3つないし2つの派 nganh に分かれている。族長などは、3つの枝に分かれて、一族全体としてもとの5つの「支」となっている、と説明する。実際、張族の忌祭、祠堂修復などのための集金が記された帳簿をみたところ、5人の名前とお金を納めた人数が記載されていた。以下がその一例である。括弧内は筆者注。

Cu Te(族長の名前)31 (人)、Chiem (甲支の1つの派の成員) 80、Ngoc(甲支のもう1つの派の長)80、Duc (乙支の成員) 31、Dong (戊支の支長) 33

甲支が分かれた理由については、丙、丁の支が失われた（失跡）ので、甲支が3つに分かれて5「支」となっているというもの。ほかに、甲支の人口の規模が大きくなったため分かれたのだというものなどが聞かれた。

祠堂については、族全体の祠堂の敷地内には、現在、甲支の族長を継いだ (an nhap tu) 成員の一家が居住している。乙支には支の祠堂はなく、支忌祭も行なわれていない。戊支には独立した建物として支の祠堂があり、支の忌祭も行なっている。甲支の派には祠堂はない。上の Ngoc 氏の派は、先述したとおり、派レベルでの忌祭を行なっており、長である Ngoc 氏の家の祭壇が祠堂の代わりとなっている。

注目したいのは、5「支」という認識とそれなりの実体（集金帳簿にみられる）が存在する一方で、同じゾンホ内部にそのことに異論を唱える人もいることである。例えば、上掲の集金帳簿の Chiem 氏について、張族の家譜保有者の1人は「人数が多いから長となっているが、1つ派でない（派よりもさらに下のレベルの分節に過ぎない：筆者 注）」と主張していた<sup>11</sup>。



## ②黄族

甲、乙の2つの支に分かれた。現在、何代目に分かれたかは不明。家譜はあるが、乙支のもので、乙支についての記載があるのみ。表2の代も、乙支の成員が、乙支の祖からの代について答えたもの。

しかし、祠堂に中央と左・右の計3つの祭壇があるので、甲支を「上」と「下」に分けて、「支」をもう1つ増やし、3つの「支」とした、と説明される。

実際の観察では、ゾンホ全体の儀礼（新たに建てた祠堂の慶成式）では、中央には一族を代表して祭文を読む長老（乙支）、向かって右の祭壇に乙支の長、左に甲支下派の長が礼拝を行っていた。祠堂の管理は、族長が他界しているので、族長の妻（80歳代）が担っている。

乙支は支の忌祭を行なっている。支の祠堂はなく、支の長の家の祭壇がその代わりである。甲支下派の「支」としての忌祭、祠堂の有無は未詳。

黄族のケースでは「祭壇があるので（「支」を増やした）」という祭祀上の要請が注目に値する。この要請は祖先以外の各種祭祀でも聞かれるものである。

## ③杜族

何代目かで3つの支に分かれたが、第1支は貧しかったので村を捨ててハノイに移り住んだ。第2支は子に恵まれず跡継ぎの養子を取ったのだが、その養子が忌祭などゾンホの活動に無関心で、ゾンホの祠堂も放置したままにしている。第3支は成員数も多く、第3支の活動が杜族全体の活動となっている。とはいえ、忌祭はあくまで第3支の祠堂で行なわれている。7、8年前、第1支の老いた成員が、YXむらを故郷として探し出して帰省した折に、ゾンホの成員として認められた、という。以上は第3支の人々の説明である。また、第3支では、新たに家譜を編集するため調査を始める動きが見られた。

第1支は、上述したように独立した活動を行っていない。以上から、分節状態として、現在は1つの支（第3支）のみが活動している、と表2に記した。<sup>12</sup>

張、黄、武とは違い杜族で第1支が機能していないことは、他のゾンホの1老人に

11 Ngoc氏の派は支祭を行なっているが、Chiem氏の派は支祭を行っていない。「1つの派でない」というニュアンスには、支と派を混同しないという意識の他、このことも含まれるのかもしれない。

12 第2支と第3支との関係は、あるいは本節において「分節」として扱うよりも、次節の「分裂」として見るべきかもしれない。が、分裂と断じ得る根拠が、他のケースと比べて、相対的に薄弱であるので、本節で述べることにした。

陰口の対象とされていた。

#### ④武族

始祖から第4代目が5人の息子をもうけ、5つの支となった。第3支と第5支は跡継ぎが絶えた。

支の忌祭を行なっているのは、第4支である。第4支に祠堂はない。第2支は支として忌祭を行なっておらず、祠堂もない。

第1支から第2派として分かれたグループが、忌祭を行なっている。祠堂はなく、派の長の祭壇が祠堂の代わりとなっている。このケースは、派（ないし支）グループとしての共有地（池）を有している（かつ家譜のベトナム語訳を保有）稀有な例であり、以下、詳述したい。

#### <支派の共有地が存続した事例>

以下は、この派 canh の長である Vu van Tuyen 翁の話を筆者が再構成したものである。

合作化の際、Tuyen 翁は仕事で村外に出ていた。祖先から伝来の池も合作社のものとなった。合作社の管理対象が縮小し始めた1978年ころから合作社、政権に対して、あの手この手で池はホのものだと提議してきた。数年前にようやく返ってきた。ただし、土地の名義人としてホは認められなかった。また、池で魚の養殖をしようかと考えたが、池は村はずれに位置し、成員は皆仕事に出ていて見張り役がいず、魚は盗まれてしまう。そこで、派内の11家族に売り、売ったお金4000万ドン（約40万円）を貯金して、その利子を忌祭にあてることにした。そうしたわけで赤い紙（土地登録書）はそれぞれ戸ごとに有している。ただし土地の真ん中の20平米と外へ出る道の87平米は残し、先祖たち cac cu の土盛 go の遺跡として、小さい廟を設けた。（池は埋め立てられている：筆者注）

この池に関しては遺書が残っている。池を残した祖先の忌祭は、私より3、4代前から行なわれている。年に3回、池に関係する3つの忌日に支派の成員が集まっている。

「多くの派は実現できないのに、なぜ Tuyen 翁の派は忌祭を行なうことが可能なのか」という筆者の質問に対しては、「分支したら、忌祭せねばならない。しかし、他の派 canh は「権利」（共有地のことであろう：筆者注）を使ってしまった。使ってしまったも本来はドンゴップ（贖金）して行なうべきである。成員数の多寡は問題

ではない。誠心の問題である」という答えが返ってきた。

このような派の活動が実現している他の例は、先述した張族の2つである。そのうちの1つの派長は、その理由として、仲が良いこと、長の性格（人望）に起因すると話していた。

#### ⑤上記以外の例：武（Vm）、杜（Dm）、阮

Vm族では、5つの支のうち、3の支がそれぞれバクザン、カオバン、タインホア（もとの出身地に戻った、と説明された）へ移り住み、現在 YX に残っているのは2つの支だ、という。支の忌祭は行なわれておらず、支の祠堂もない。Dm族はもと6支あったが結果として村に残っているのは2支のみだ、という。

阮という姓をもつ4グループは、通常それぞれが別個のホであるという見方が強いが、なかには同じホの「支」だという説明も聞かれる。この場合、「同じホ」といっても、他のホに比べ、系譜的つながりは辿れない。実際に、以前、村内政治上、阮姓の立場を向上させるために、統合しようという話が老人たちの間で盛り上がったが、若い者たちからの反対で取り止めになったことがあった、という。

Vm、Dm、阮の例の特徴は、いずれも伝承者の口碑といえる類のものであって、文字資料や観察で確認したものでないことにある。

#### （5）分裂状態

- TK では、次の報告がある。土地分与をめぐるある家とその養子との間で対立状態がみられる。養家がゾンホ会議の場で、今後養子がゾンホ内の他の家に行っても相手にしないように申し入れている。ただしそのまま聞き入れられた訳ではない。また背景には最近の土地価格の高騰がある。（末成 1999:295）
- VX では、次の報告がある。葬式をめぐる死者の前妻の長男と後妻の間に対立状態がみられる。後妻は姑と仲が悪かった。この対立を回避するためにゾンホの規約が成文化されている。（宮沢 1999:20）
- BC では、古く黎末（18世紀）に、一ゾンホ内で土地争いが見られた（八尾 1998）。また（嶋尾 :227）には18世紀のあるゾンホの諸紛争が記述されている。

こうして他村のケースをみると、以下で記述する YX の事例にも普遍的な要素が少なくないこと、また BC のケースからは、単に近年の土地登録制度に起因する

ものだけではないと考えるべきであろうこと等がわかり興味深い。

以下では分裂について、どの分節で起きていることなのか、分裂ないし対立の結果、どのような行動を取っているのか、という視点を中心として論を進めていく。

### ①張族

以下は、族長一家以外の張族成員（婚出した張族の女性含む）から聞いた話を総合したものである。族長一家の成員からの言い分は含まれていない。

数年前、祠堂を再建する動きがあった。族長は再建に賛成し、いったんホの中で集金も行なわれたが、ホの中の一部に反対する声が出た。それに対して、族長の一家の若い者<sup>13</sup>が（ホの意向を無視して）強行して、費用も族長一家が負担する形で再建した。

3,4年前（上の再建の話とこの土地がらみの話との時間的な前後関係は不明）、行政（社）から赤い紙 giay do（土地使用権証明書）が給付される際に、族長の息子が、祠堂の土地の権利を主張し、族長の息子の嫁はホと訴訟をおこす構えという。それがホの長老たち(cac cu)の怒りを買った。社の書類上、祠堂、壇(phe tam)がホの名義になっているという話と、本来ホであるべきものを族長の家族が家族の名義にしてしまったという話とが聞かれた。詳細は不明。そのことをめぐってなされた族長の一家の会話一切を、裏の家の長老（第5支）が聞いており、ホに伝えた、ともいう。

以後、ホの忌祭は、族長一家とは別に行なうようになったという。かつては、祠堂へ礼物を担いで ruoc 行ったが、現在は、当番（ダンカイ）の家で礼拝を行い、食事をする。族長およびその息子と一緒に食べない、という。他に、当番の家ではなく、壇(phe tam)で礼拝をする、という話も聞かれた。

では実際はどう行なわれたか。筆者は族長の家に招かれて終始そこに居た。したがって壇および当番の祭壇へ礼物を持参し、礼拝を行なったかどうか観察できなかった。上の話と異なっていたのは、筆者の観察では、確かに族長の家では食事をしていなかったが、族長の家の祭壇にも、一部の人の手で礼物が持ってこられ、しばらく線香が燃えるのを待った後で、礼物を下げて、帰っていったことである。

たとえ訴訟になっても始祖を祀る祭壇への供物と礼拝は欠かさない、という点は次の武族の例でも共通している。

13 族長自体は、息子ら若い者に「文化、教養」がないと常日頃謝っており、悪い人ではない、と族長をかばう意見も聞かれた。

## ②武族

以下は代理の族長である人物(T氏)とその妻の話を総合したものである。ついで、実際の忌祭について観察に基づき記述する。その後、調査期間中に、起きた出来事についても述べる。

T氏の父方祖父には、7人の息子があった。そのうち長男は子どもに恵まれなかった。次男はアメリカに移り住んだ。次男の長女と次女は近隣村に嫁した。そのため、3男の1人息子であるT氏が、長男の代理として族長を担っているのである。ただし、T氏は80年代に村に戻るまで長年銀行員としてホアビンに勤務していた。その間、祠堂の管理は、ハノイに住む5男の息子が担っていた。T氏が村に戻ってから現在に至るまで祠堂の堂守はその人物である。

近隣村に住むT氏の従姉がハノイの祠堂堂守氏と結託して、祠堂の土地と3サオの池の赤い紙(土地所有権証明書)を申請して、取得した。そして一族の反対にもかかわらず、池を埋めて売ろうとしている。T氏らは社に和解を依頼したが、社レベルでは解決できなかった。そのため、市の裁判所に告訴した。遺書がT氏宅で見つかったので、ハンノム院に依頼してベトナム語に訳した。「1サオは内祖母。1サオは内孫chau noiが忌のために。1サオは兄弟で」と書いてあった。しかし、結果は赤い紙がある相手側の勝訴。こちらの遺書(ハンノム院に翻訳を依頼)は「古いので価値なし」とされた。また、(その後、T氏側で雇った名の有る弁護士によると)相手側は裁判官を買収した。以後の15日の間に、一族で集まり、相談して、最高裁判所への上告を決定した。その後、国家の関連指示の改正で、土地争い関連の訴訟はすべて保留になった。それで、現在は待ちの状態。

以下T氏の発言。

「出嫁」女性には権利がない。姉らは長である私に祠堂を渡すと都合が悪いので、私の下で4男の息子が祠堂を管理させた。法律でも、この種の土地は、祖先を祭るための土地として、「香火」という用語がある。ベトナムの風俗習慣では、姉らの行為は認められていない。

調査期間中に2回の忌祭を観察した。1度目は、T氏宅が当番であった。できあがった礼物を、まずは10数名ほどの一族の者が祠堂に運び、堂守氏が礼拝を行なった。その後、線香が燃えるのを暫く待ってから、今度はT氏宅に礼物を持参し、T氏宅の祭壇でT氏が礼拝を行なった。その後、T氏宅にて食事を取った。堂守氏はT氏

宅では食事をしなかった。

その後、祠堂の土地に建立してあった碑文に、碑文のための屋根付きの建物 *nha bia* をホで建てた。それを知った堂守氏が、(氏の家族の?) 若者を使い、その建物を破壊した。

さらにその後に行なわれた2度目の忌祭では、忌祭に先立ち、そのことをめぐって当番の家でホの会議が開かれた。協議の結果、その場に堂守氏を呼び出して、ホとして言うべきことを言うことになり、誰がどういうことを言うかについても決められた。堂守氏は現れてしばらくは話を聞いていたが、途中、激しい調子で意見を述べた後で、その場を立ち去ってしまった。

ハノイに居住する堂守氏は、筆者の観察でも、毎月2回村に帰ってきて祠堂での上香を行っていた。とはいえ、武族のケースは、先の張族、次の黄族と比べ、族長(代行)と堂守が同一でない点が異なっている。また、「問題」を起こしているのが、張族では「若い者」、武族では「ハノイ居住者および村外へ婚出した女性」、次の黄族では「嫁」となっている<sup>14</sup>。

### ③黄族

以下は筆者の観察に基づく記述である。

5月11日、黄氏祠堂落成儀礼にて。堂守の高齢女性(亡き族長の妻)が皆にむかって発言。「祠堂は木で作ること。壊れたら直すこと。今後もずっと守ること。勝手に出入りしないこと。」。これに対してその嫁が「祠堂の土地はうちの家族が貸しているもの。先祖が遺書を残さなかった。」などこの土地があくまで自分の家族のものであって、一族のものではないことを主張。堂守の老女が腹を立て、しばらく2人で言い争う。結局は、長老たちが皆揃う2月10日の忌祭のときに決めよう、という形でその場は収拾した。

とくに村の中高年の人びとは大抵男女ともに、以上3例の係争について一定程度は知っていると思われる<sup>15</sup>。上の黄族の出来事も、例えば「祠堂は木で作ること」という主張の背後には張族の祠堂が民家のようにモルタルで再建されたことを踏まえているものと思われる。

14 背景として各々、ベトナムにおける年齢原理の相対的価値(李 2005)、「ゾンホの恒常的な成員がむらの中に限定される傾向」(末成 1998:311)、財産上の女性の地位の高さ(宮沢 1996)等が想起される。

15 武族の人びとが筆者に係争を見せたがらなかったといった状況もあったが。

## (6) 広域化

- TK の事例から末成は「ゾンホの恒常的な成員がむらの中に限定される傾向」(末成 1998:311) について指摘した。それに対して、VX では阮文族に 100 キロ離れた村に居住する支派との交流が現在みられる。またその場所へ 1906 年、1926 年に家譜について調べに行っていること、BC では、「十七—十八世紀段階においては、阮公族の<后>のように社(=本稿でいう「むら」：筆者注)の枠組みを越える族の活動が見られた」(嶋尾 2000:244) といった上述の末成の指摘にうまく当てはまらない過去の事例が報告されている。

YX の場合、過去にそうした事例は見られない。最近の動きとして、ゾンホの全国ネットワーク化が武族に見られたので、簡単に触れておく。

武族の忌祭にホーチミンから 1 人が参加した。この人物は、武族 ho Vu について自分で研究している、と話す。Vu Hong は中国人であって起祖ではなく、ベトナムの武族の起祖はベトナム人という。

その Vu Hong については、ハドンの町にある全国武族連絡班の委員から、YX の武族長老がもらった新聞記事(1997年11月)にも記載があった。そこには、1997年1月12日、ハノイにて武氏連絡班が会合を開催し、国内外から 400 人が参加。起祖は、Vu Hong。9 世紀に、科挙合格者輩出で有名な Mo Trach むらを立てた人物であること。この機会に、『武一族(ho Vu)歴史草稿』、『祖先とともにある子孫』を収集、編纂したこと。1998 年には『武氏の名人』を出版する予定があることなどが記載されている。

その次の機会の Vu Hong の忌祭には、YX の武族も、Vu Hong の出身地ハイズオンに、代表を送り参加した。筆者はその写真を見せてもらった。なお YX の武族の家譜にはルーツがどこかは記載されていない。

## (7) ミドルネーム

- TK では、ミドル・ネームを別にすることで、忌祭、家譜、祠堂が別れ、通婚可能となるなど、別々のグループとして機能する。
- VX では、ミドル・ネームは分かれているが、あくまで 1 つのゾンホとして意識され、ゾンホ内部において別々の分節であること目印となっているに過ぎない。村内婚に加え、学識に裏付けされた独特のゾンホ観やプライドがミドルネームの背景

にあると推論されている。

- ・BCでは、ゾンホの区別のためにミドルネーム（中字）が意識的に利用されてきた歴史的過程が明らかにされている。また「必ずしも村内婚規範を前提にせずとも、中字による外婚単位の細分化は必要なことであり、それが「中字」の重視の契機となったことは考えられる」と指摘している。

興味深いことに、YXでは、上のいずれかのような、ミドル・ネームによる区別は、黄清族のケースを除き、見られない。そしてどのグループも分節も、「文」vanという一般的なミドルネームである<sup>16</sup>。具体的には、次のようになっている。

姓が重複するが、別々のゾンホであるとされている姓は、黄、武、杜、阮の4つある。黄について、黄清族の「清」は出身地の「清化」タインホアに由来する。詳細は、拙稿で述べたのでここでは割愛する（拙稿 2006:101-102）。次に、武、杜のケースについては、大きいゾンホの武ないし杜なのか、小さいゾンホの武ないし杜なのかを区別する場合は、小さいゾンホの方に、「かけら、小さい」という意味のmanhをつけて「Vu manh」と呼んだり、あるいはA,Bをつけて「Vu B」という言い方も聞かれたりした。最後に、阮については、「誰々さんの阮」というように、個人の名前を付すことが多い。

YXでは一般に分節は、忌祭、家譜、祠堂を有していても、あくまで分節(支)としての活動であり、TKと異なり、通婚は出来ない。そして、各自がどの分節に属しているかは、甲支、乙支、丙支、丁支、戊支といった表現がなされることが多く、時に第1支、第2支・・・といった表現がなされる。

検討すべき問題点は次の2点と思われる<sup>17</sup>。

#### 問題点①

嶋尾の次の問題提起をめぐって。嶋尾は「現在の聞き取りでは村内婚が圧倒的ではあるが、歴史的に見ると」「他村から妻をもらうことも、他村へ娘を妻として出すことも決して例外的ではない」というBCの事例を以って、「必ずしも村内婚を前提にせずとも、中字による外婚単位の細分化は必要なことであり」として、「ミドルネー

16 文址に、「功」が 人と「伯」が 人見られる。詳細は不明だが、「功」は役職者、「伯」は爵位保有者であることを表すものか。

17 他にも、TKでミドルネームを別にしてしているゾンホはYXよりも規模が大きいこと、またとくにBC、VXでは阮姓の人口が多いことも重要であろう。



## 研究ノート・資料

ム成立の理由を、末成道男・宮沢千尋は、強烈な村内婚規範の中での外婚単位の創出の必要性に見出している」ことを批判した。

しかし、YXでは、「中字による外婚単位の細分化は必要なこと」とはみなされていない。以下のa)、b)に示したように、YXにおいてもBCに似て、村の外に配偶者を求めることはさほど例外的ではない。しかし、少なくともYXの文脈においては、出身村が違えば、姓+ミドルネームが同じであることは大して問題とはならないように思われる。むしろ、YXの事例で、注目されるのは次の2点であるように思われる。

第一に、BCの事例(嶋尾 2000: 242)とは異なり、YXの張族家譜には表3、表4に見られるようにミドルネームの記載がみられない(後述する唯一の例外を除いて)。このことは、推測だが、YXにおいてミドルネームに対する関心が薄いことを物語ることかもしれない。第二に、唯一の例外である表3の「黄杜」のケースである。黄杜は、黄が姓で、杜をミドルネームとしていると目される。このケースは、家譜によれば、第四代の次女の嫁ぎ先とあるが、それ以上の詳細は不明である。直接このケースについてではないが、筆者は次のような会話を調査中に聞いたことがある。息子がいないケースで、死後の祭祀を娘の息子(外孫)に財産を残して依頼する場合<sup>18</sup>、外孫にミドルネームとして父の姓を継がせたらよいのではないか、というアイデアをめぐる会話である。先の「黄杜」のケースも、そのアイデアに相当するものであった可能性が高いと筆者は考えている。なお武族家譜(1872年)にも、婚出先の相手の姓に「黄張」という例が1例見られる。

#### a) 現在の聞き取りに基づく村内婚の割合

15 家族、78 人の例 (1925~1969 年生まれ)。村内婚が 56.5%、村外婚が 43.5%。

村外婚 34 例のうち、村の女性が村の外へ婚出した例が 14 例 (41.1%)、他所の女性が村に婚入した例が 14 例 (41.1%)、他所の男性が村に婚入した例が 5 例 (14.7%) であった。他所の男女が婚入してくる例が多い第一の要因は、ハノイ近郊という生計を立てる上で有利な土地柄であろう。

#### b) 張族家譜にみる結婚

結果<sup>19</sup>は、表3にあるように、他の村に娘を嫁がせる例は11例中の2例のみと少

18 子孫からみたら「外祖」として表現される。ベトナムの祖先祭祀にはしばしば見られる。

19 出身地が記されていないケースはYXと判断した。その判断は、姓(黄、杜、武、阮)の種類等からみて蓋然性が高いだろう。

ないが、他村から嫁をもらう例は表4にあるように、17例中8例と少なくない。村内婚の比率で言えば、それぞれ81.8%と52.9%であった。全体の村内婚率は、64.2%であった。なお武族家譜(1872)から同様の数値のみを示すと、他の村に娘を嫁がせる例は42例中の11例、他村から嫁をもらう例は71例中10例。村内婚比率は、それぞれ73.8%と87.6%、全体では、80.7%であった。

YXの人びとの意識では(BCとは異なり)、村内婚は過去のことであり、現在のほうが村の外に配偶者を求めること一般的である。ここでみた数字はその意識を裏付けている。

表3 張族女性の婚出先(張族家譜 1885年編纂より)

相手の姓	村名	村の場所	人数
黄	YX	村内	4
阮	YX	村内	2
杜	YX	村内	1
武	YX	村内	1
黄杜	YX	村内	1
武	車羅	隣接村	1
黎	茂良	隣接村	1
計			11

表4 張族女性配偶者の姓と出身村

相手の姓	出身村	村の場所	人数
阮	YX	村内	4
黄	YX	村内	3
武	YX	村内	2
武	潮曲(TK)	隣接村	1
阮	潮曲(TK)	隣接村	1
杜	安福	隣接村(本総)	1
鄧	荷池	隣接村	1
阮	車羅	隣接村	1
阮		海陽省(ハイズオン)	1
阮		清化省(タインホア)	1
阮		ゲアン省	1
計			17

## 問題点②

YX でミドルネームが顕著でないのは次のような背景があるのではないか。すなわち、VX との違い（VX では同じゾンホ内部の別の分節であることの目印としてミドルネームが利用されている）として、ゾンホの忌祭が活発（成員の参加率が高い）に行なわれており、忌祭の度に、世代、分節など自らのゾンホ内における位置を確認することが可能（じっさい、たびたびそうした場面がみられた）であること、また、家譜やメモ書きをゾンホの主要なメンバーが所持しており、例えば、張族の族長代理の長老が、家譜は所持していないが、乙、丙などの支に属しているのが誰かを確認するために、下着の胸のポケットからメモ書きを取り出してみていたように、必要な時にそれらを参照していること、である。

そこで次章ではこのような家譜のありかたについて詳しくみていきたい。

（次号につづく）

## &lt;参考文献&gt;

川上崇・末成道男

- 2006 「家族・親族」末成道男編『ベトナムに関する日本人類学研究の総括と現地への発信』平成 14～17 年度科学研究費補助金 基盤研究(B)研究成果報告書、33-36 頁

嶋尾稔

- 2000 「十九世紀―二〇世紀初頭北部ベトナム村落における族結合再編」吉原和男・鈴木正崇・末成道男編『<血縁>の再構築：東アジアにおける父系出自と同姓結合』風響社、213-254 頁

末成道男

- 1998 『ベトナムの祖先祭祀：潮曲の社会生活』風響社

比留間洋一

- 2006 「ベトナム北部・Y 村におけるむら祭りと父系親族集団の変遷」静岡県立大学国際関係学部『国際関係・比較文化研究』第 4 巻第 2 号:99-120

宮沢千尋

- 1996 「ベトナム北部における女性の財産上の地位：19 世紀から 1920 年代末までの補章」、末成道男編『人類学からみたベトナム社会の基礎的研究：社会構造と社会変動の理論的検討』朋文社、72-92 頁

宮沢千尋

- 1999 「ベトナム北部の父系親族集団の一事例：儒教的規範と実態」『ベトナムの社会と文化』1:7-33 風響社

宮沢千尋

- 2000 「ベトナム北部の父系出自・外族・同姓結合」吉原和男・鈴木正崇・末成道男編『＜血縁＞の再構築：東アジアにおける父系出自と同姓結合』風響社 185-211 頁

八尾隆生

- 1998 「黎末北部ヴェトナム村落社会の一段面：ナムディン省旧百穀社の事例」『南方文化』25:113-132

李鎮栄

- 2005 「年齢意識と意思決定：ベトナムと韓国」『民俗文化の再生と創造：東アジア沿海地域の人類学的研究』風響社、153-166 頁